

國學院大學學術情報リポジトリ

・第4回「国学研究への入り口：
生涯学習の観点から」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000544

平成30年度第4回国学研究プラットフォーム公開レクチャー 「国学研究への入り口ー生涯学習の観点からー」要旨

国学研究の成果、そして面白さを一般市民に享受してもらうために、研究者には何ができるだろうか。この課題を考えるために、基礎自治体における生涯学習と在野の研究者の実例を紹介した。そして、一般市民に、受け身ではない主体的な学びを促すための方途を、市民大学校で学ぶシニア層・講演会の参加者・大学生の関心を踏まえて考察した。

なお、本稿では、限られた紙幅で論旨を明確に伝えるために、節のタイトルを報告時のものから変更している。

1. 基礎自治体における生涯学習

報告者が勤務する博物館が所在し、平田篤胤との関係も深い千葉県船橋市・報告者が市民と古文書サークルを立ち上げた埼玉県八潮市・報告者が研究している平田篤胤門人の生家がある千葉県旭市の事例を紹介した。そして、市民の意識について、①地域調べのテーマや町歩きでの訪問地の候補として、地元の神社や寺院への関心は高い、②国学を学んだ地元の人物や国学という学問を調べる者は少ない、③展示会・講演会は、地元の歴史を学べるテーマであれば幅広く関心を持つ者が多く、地元の国学を取り上げた講演会は盛況だったと指摘した。また、④市が発信している情報に、最新の研究動向が反映されておらず、事実誤認も散見すると指摘した。

③は、国学研究の最新の知見を伝える回路があることを示している。しかし、②からわかるように、研究者以外の市民にとって国学は、受け身で学ぶ対象であっても主体的に調べる対象になっていない。その結果、事実誤

認を含んだ情報が、そのまま受け止められてしまっている。

2. 在野の研究者

報告者は、在野の研究者の方々と接し、独学で歴史や思想史を研究する難しさを感じることがある。例えば、学界の常識と異なる理解は、参照すべき文献と史料に関する情報量の不足や、ゼミ・研究会・学会といった議論の場との接点の少なさによる面があるだろう。また、研究機関に所属していないが故の史料閲覧の困難さや、コピー代等の金銭的負担の大きさを吐露する方もいる。

ところで、報告者と同じく宮負定雄（平田篤胤生前の門人）の研究に取り組んでいる社会人学生A氏は、大学生時代の専攻が社会福祉だったそうである。そして、大学生時代の専攻を踏まえて大原幽学について調べようとしたところ、幽学と同時期に近くで活動していた宮負定雄を知り、彼の著述に関心を持ったという。筆者も、自分が住む千葉県の地方知識人を探す過程で宮負定雄を知り、史料や論文を読んで関心を強めていった。漠然と関心を持っていたテーマや地域について調べるうちに、国学者や国学者に関する史料と出会い、対象や史料の面白さに惹きつけられていく例は多いように思う。

3. シニア層の地域研究

船橋市の市民大学校で学ぶ学生（60代以上が大半）の地域研究テーマ選定理由を分析した。多くの学生は、初発に地元への漠然とした関心を持っており、講義や現地踏査で興味

深いと感じたテーマを選んでいる。「寺社」は人気テーマの一つだが、「寺社」と銘打って寺院のみを調べた学生もいた。また、研究の方法面に着目すると、現地踏査と聞き取り調査には積極的だが、市外の図書館に足を運ぶ者は稀で、学術雑誌もほとんど参照していない。ただし、市内の多様な地域性を、研究者以上に細かく意識している者が多いことは注目される。

こうした傾向を踏まえると、研究者には、以下の点が求められていると考える。

- ①良質な参考文献と、それらの利用（アクセス）の仕方を伝えること
- ②史料の文言から豊かなイメージを抱けるような史跡や場所を伝え、その環境整備に努めること
- ③研究成果を、市民の潜在的な学習意欲を刺激するような形で発信すること

4. 初学者対象の講義・講演

大学（社会学部・文学部史学科）での講義と市民対象の講演で、近世社会や国学に関する事前知識があまりない相手に、史料を読んでもらうために行った工夫を紹介した。例えば、史料が保管されている現地や蔵の写真をスライドで見せてから、あるいは国学者の地誌や日記から江戸時代の会場付近の景観を読み解いてから、本題に入るというものである。特に後者には、世代を問わず、強い関心を示していた。

また、船橋市内の講演会では、幅広い層の市民に、平田篤胤・鋳胤と市域の平田門人に関する史料の面白さを伝えるために、演題を工夫した。講演会に来てもらわないと、地元と国学の関係を伝えられない。しかし、市の広報紙には、演題以外は内容に関する情報が載らない。そこで、市民の間で、近代の文学者と地元の関係への関心が高いことを踏まえ、「船橋を歩いた文人たち」という演題を考えた。

講演では、演題と話題の整合性を持たせるために、明治期の文学者は取り上げた。また、「地方文人」に関する研究や、平田篤胤と門人の相互影響関係に関する研究も紹介した。すると、演題から予想していた内容と違ったが面白かったという反応が多かった。

5. 市民のための環境整備

国学者や地方門人が記した史料は、地域の歴史や民俗を知る上での貴重な情報が得られる。研究者は、自分の関心に基づいて史料を利用だけでなく、史料の全体像や形成過程への理解を深め、研究者以外の市民が調べ物に使いやすい環境を整えることを意識すべきだと考える。また、地域に根差した国学者の営為や、地元と国学・国学者との結びつきをイメージできるような身近な「場」の発見と整備（3節②と関連）、市民が学習を続けやすい環境の整備（2節と関連）も、研究者は意識すべきだろう。

（小田真裕）